

## 令和時代のアナリストの キャリアを考える



東京理科大学大学院経営学研究科  
技術経営 (MOT) 専攻 教授

若林 秀樹 CMA

現在、東京理科大学大学院経営学研究科で、教授10名強の技術経営 (MOT) 専攻の長、教授として社会人学生2学年100名強に、業界分析等の科目を教え、10名強の社会人学生のゼミも担当している。傍ら、No Sideアナリストとして、電機業界等を中心に説明会や工場研究所見学会にも参加、積極的に質疑もしている。

ここに至る軌跡を紹介しつつ、三つの話題を提供するが、皆さまの参考になれば幸いだ。

第一は、キャリアパスだ。多くの方もそうだろうが、必然と偶然の要素が絡みあっている。

小学生時代に、第1次シンクタンクブームがあり、万博の入場者数を野村総研が予測との記事に影響され、当時の作文に将来の仕事をシンクタンクと書いている。中高では田舎の学校で数学ができた自惚れから、理系の物理や数学の学者を目指して、理系に入った。しかし、より現実的で幅広い可能性がある工学部に進み、大学院までホログラフィの研究をした。

それはそれで面白かったが、修士時代に科研費が当たり、大いに研究が進んだことから、技術者として開発するのもいいが、むしろ技術を評価し金を付ける側になることも重要だと考えた。当時は電機業界が最盛